ツバキキンカクチャワンタケを採取してきました

技術士（衛生工学部門、生物工学部門）
環境カウンセラー（事業者部門）
本　堀　　雷　太

●ツバキキンカクチャワンタケ（*Ciborinia camelliae*）とは

キンカクキン科に分類される子嚢菌の一種で、専らツバキの花弁に取り付き、これを栄養分として育つ菌類です。

ツバキの開花期に花弁が落ちている付近の落ち葉を掻き分けると、茶碗状の子実体（キノコ）を見つける事ができます。この子実体から放たれた胞子は開花しているツバキの花弁に取り付き、菌糸を伸ばしながらツバキの花を変色させます。そして、落下したツバキの花弁を栄養分として秋までに菌核を形成し、この状態で越冬します。

菌核とは、子実体を形成するのに不都合な環境下において、この状況を耐えるために形成される菌糸が集合した構造体の事で、環境が好転すれば子実体を形成します。この様な菌類の事を「菌核菌」と言います。

ツバキキンカクチャワンタケにおいても、春が近づきツバキが開花する様な時期になれば、菌核から子実体が形成され、胞子を放出し、開花したツバキの花弁に感染して子孫を残します。

今回は、名古屋市内のツバキの木の下でツバキキンカクチャワンタケの子実体を採取して記録撮影しました。

ツバキの花

落ちた花弁の横にキノコが生えています（矢印）

ツバキキンカクチャワンタケです

掘りだしてみました

若い茶碗状の子実体

掘りだしてみました

成熟した皿状の子実体

落ち葉を取り除いたところ

掘り出したところ

柄部が伸びた菌核です